

マタイによる福音書5章43節～48節

- 43 あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。
44 しかし、私は言う。敵を愛し、自分を迫害する者の為に祈りなさい。
45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。
46 自分を愛してくれる人を愛した所で、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。
47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れた事をした事になるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。
48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。

説教 『敵を愛し、迫害する者のために、祈りなさい。』

- ◆今日の聖書における「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」とのイエス様の御教えは、クリスチャンでない人々の間でも一番よく知られたものだと思います。聖書理解、キリスト教理解は、この教えを如何に理解し、受け止めるかにかかっています。
- ◆昨日の夕刊、今朝の朝刊の第1面の記事は、羽生結弦選手と宇野昌磨選手の平昌オリンピックでの金・銀メダルの獲得の記事と、将棋の藤井聡太君の6段昇段の記事で占められていました。羽生選手は23歳、宇野選手は20歳、藤井聡太君はまだ15歳の中学3年生です。「日本の若者、なかなかやるな！元気だな！」と思いました。
- ◆今日の日曜学校は幼児から中学生まで、そして大人も交えて賑やかでした。先週もそうでしたが、今日も大人の礼拝と同じ聖書の箇所です。先週は、説教の冒頭で、「みんな、死にたいと思ったことある？」と聞きましたら、小学6年の女生徒が、「うん」とうなずきました。今日は、「先週、みんなに、死にたいと思ったことあると質問したけれど、あんな奴、いなければいいのに！あんな奴、死んでしまえばいいのに！と思うようなことあった？」と聞きますと先週「うん」と頷いた女生徒の4年生になる弟が「うん！」とうなずきました。今更のように、子供達もしんどい人生を生きているのだと思い知らされました。
- ◆いじめを苦しめての自殺の報道も後を断ちません。しかし死ぬという事は、たやすくできることではありませんね。しかし「いじめを苦しめての自殺」は命がけの仕返しです。いじめをした者たちも、その命がけの仕返しは、生涯心に刺さり、苦しみの人生を送らざるを得ません。誰もいじめたり、いじめられたりすることがないことを、願わないではおれません。
- ◆主イエス様の弟子の一人「イスカリオテのユダ」は「裏切り者」の代名詞になりましたが、「イスカリオテ」は地名ではなく、「シカリ党」の意味なのです。「シカリ」は「短剣」の事です。「シカリ党」は簡単に云ってしまえば、武力(剣)をもって体制を倒そうとする徒党です。ユダは、主イエス様こそ、その頭領にふさわしい人と見込んでイエス様の弟子になりました。

しかしいつまで経ってもイエス様は行動を起こされない。業を煮やしたユダは、そのきっかけを作ろうと、イエス様を敵方に銀30枚、奴隷売買の価格で売り渡します。しかしユダは自分の考えの誤りに気付かされ、首を吊って自殺します。極論すれば、ユダの自殺は命がけの懺悔です。他方、ユダを除く11人の弟子達は、主イエス様に従います。しかし、結局、主イエス様が捕えられ、裁判にかけられた時、他の弟子たちは、イエス様との関係を否認します。そして主イエス・キリストは十字架に架けられて、命を落とされたのです。

◆北教会の2016年と2017年の標語聖句はヨハネによる福音書20章21節にある主イエス様の御言葉でした。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったようにわたしもあなたがたを遣わす。」この御言葉は今日の御言葉と密接に関係しますので、20章19節以下を読んでみます。「19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。』」

◆イスカリオテのユダを除く他の弟子達こそ「裏切り者」です。彼らは「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。

「あなたがたに平和があるように！」これはユダヤ人の日常挨拶語「シャーローム」です。生前のイエス様と十字架後のイエス様の弟子達への態度は全く変わりません。恐怖と悔恨に閉ざされていた「弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。彼らはその赦され難い裏切りの罪を赦されたのです。こうして「キリスト教会」が誕生したのです。

◆今日の御言葉に関連して思い起こした事があります。私と孝子さんの初めての外国旅行がブラジルであった事は何度かお話ししましたが、今日の御言葉との関連で、新たに思い起こしたことがあります。それは、「ブラジル基督教会」の「主の日」＝「日曜日」の礼拝が、私たちのように午前ではなく、夕方から始まることです。「ブラジル基督教会」のモットーは、「教会のすべてのことは、聖書に示されている通りに」であります。先程のヨハネによる福音書の20章の19節にこうありました。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへイエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」と。正に、「週の初めの日の夕方」に教会が起こされたのです。十字架の主にして復活の主の顕現と御赦しによって教会は生まれたのです。そしてこの事情はいつの時代のどの国における教会にも当てはまる事です。

◆「敵を愛し、迫害する者の為に祈りなさい。」これを生きることは至難、不可能どころか、これこそがイエス様の終始一貫した態度であります。弟子達は皆、主イエス・キリストとの関係を否認した『裏切り者』です。その裏切り者の弟子達に対して、主イエス・キリストは、

生前と全く同じように、弟子たちに『あなたがたに平和があるように』と繰り返し挨拶されたのです。この『あなたがたに平和があるように』との日常の挨拶「シャーローム」こそは、正に赦しです。不変の愛です。「敵を愛し、迫害する者の為の祈り」です。私達大阪北教会に2016年と2017年の標語聖句として与えられたのは、このヨハネによる福音書20章21節の「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」との御言葉でした。赦しを受け、赦しに生きる以外に、命の道はありません。

◆使徒パウロは「教会の迫害者」でした。熱心なユダヤ教徒としてのパウロにはキリスト者の言説は許しがたい神冒瀆に思え、極端な熱心をもって基督者を迫害し、教会撲滅に奔走し、多くの基督者を死に追いやりました。そのパウロが、復活の主イエス・キリストに捕えられ、回心して、史上一番熱心と言ってもよい「基督教伝道者」に変えられました。そのパウロがコリント前書10章31節～11章1節でこのように言っております。「10:31 だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、全て神の栄光を現すためにしなさい。10:3 ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、あなたがたは人を惑わす原因にならないようにしなさい。10:33 わたしも、人々を救うために、自分の益ではなく多くの人の益を求めて、すべての点ですべての人を喜ばそうとされているのですから。11:01 わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」またガラテヤ書2章20節でこう言っています。「最早われ生くるにあらず、基督我が内に在りて生くるなり」と。「敵を愛し、迫害する者の為に祈りなさい」と求め給う御方は、十字架と復活の主イエス様、その方であります。その赦しの主イエス様は常にこの私と共にいて下さるのです。

◆今日の御言葉、「敵を愛し、迫害する者の為に祈りなさい」は、比類のない、真摯・厳粛な主イエス様の勧めの御言葉です。この御言葉を生きることは至難どころか、そんなことは不可能とさえ思えるかもしれません。しかし、これがこの御言葉を語られるイエス様の終始一貫した態度、姿勢です。裏切り者。迫害者に対する変わらざる接し方であります。今日、わたしたちが、この聖書を通して、お聞きするイエス様の御言葉は、この御言葉を聞くわたしたちに、当初、戸惑い、困惑を越えて、畏怖の念をさえ抱かせるものであります。「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。」「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」これは途方もない勧めであります。イエス様は掛け値なしに、心底から、透徹した思いで、この御言葉をわたしたちに語っておられるのを覚えます。「倫理」だとか「道徳」だとか「律法」という言葉さえ陳腐に思えるほどです。

◆この様に私たちにお語りになるイエス様の真意は、意図は一体何処にあるのでしょうか。イエス様は私たちを何求めておられるのでしょうか。「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われますと、私達は、この「自分の敵」を、「自分を迫害する者」を懸命に探し求めないのでしょうか。そして、「あんな人は、絶対に許せない。」「あれほど自分を苦しめた者は、自分と同じ苦しみを味わえばよい。地獄に墮ちろ!」と、呪ったりさえするのではないのでしょうか。しかし、私は、このイエス様の御言葉を聞き、思い巡らす内に、この御言葉こそ福音の極みと思うようになりました。44節で、「敵を愛し、

自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われます。当初、この「敵」とか「迫害する者」というのは、この私に対する「敵」、この「私を迫害する者」の意味で、読み、聞きました。しかし、この「敵」、この「迫害する者」とは、他の誰のことでもなく、神様に「敵する者」、「神様に楯突く者」としての、この「私自身」に他ならないと思いました。そうしますと、このイエス様の御言葉の焦点が、意味が違ってきます。つまり、「あなたは、神様に敵対し、あなたは神様に楯突く者であったのに、今もあるのに、神様は一貫して、常にあなたを愛し、あなたを顧みておられるか、顧みて来られた。これまでも、今もそうであり、これからもそうである。その事を、覚えなさい」との御言葉に思えました。

◆今日も詩編103篇1節～5節を交読したのですが、この詩編とイエス様の今日の御言葉が共鳴するのを覚えます。

(司会) 私の魂よ、主をたたえよ。(会衆) 私の内にあるものはこぞって聖なる御名を讃えよ。

(司会) わたしの魂よ、主をたたえよ。(会衆) 主の御計らいを、何ひとつ忘れてはならない。

(司会) 主は、あなたの罪をことごとく赦し、(会衆) 病をすべていやし、

(司会) 命を墓からあがない出してくださる。(会衆) 慈しみと憐れみの冠をさずけ、

(司会) 長らえる限り、良い物に満ち足らせ、(会衆) 鷺のような若さを、新たにしてお下さる。

◆「このように、あなたは父なる神様にどこまでも愛されている子供なのですから、神の子の自覚をもって、あの事もこの事もしなさい。そして、あなたは神の子として、神様に祝された者として、感謝し、聖名を讃えつつ、日々を生きなさい。」「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛した所で、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。」十字架の前も後も、イエス様の態度は微塵も変わらないのです。

◆イエス様はこう言われます。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と。イエス様をさえ私達の救いのために犠牲にして惜しまれない父なる神様の御愛こそ完全です。その完全な御愛に、御赦しに全身全霊浸りなさい。その完全な御愛に包まれている身の幸いを覚えなさい。そして父なる神様のように生きなさい。上で触れた使徒パウロは、何度処刑されても仕方のないような人でした。そのパウロがああ「復活の章」、コリント前書15章でこう告白しています。「ただ神様の恵みによって、わたしは今日あるを得ています」と。心から神様に感謝し、その憐れみ・赦し・恵みに身も魂も浸っています。今日のイエス様の御言葉は、実践不可能な非人間的な教えではなく、滅びに価する罪人が生き得る唯一の幸いな道なのです。イエス様の戒めは福音なのです。

◆お祈りいたします。

憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたの御赦しがなければ、あなたの御愛が限りあるものであるならば、私たちは滅びるほかありません。しかし、私達は常にあなたの御愛に包まれ、イエス様が常に共にいまして、最善の顧みをなして下さることを覚え、心から感謝いたします。今日、聖書を通して頂いた御言葉を、御赦しと御愛の御言葉として身と魂に刻み、これからの日々を歩む者達とならせて下さい。イエス様の聖名を通しこの祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。